

『エドワード三世』の作者について：歴史劇における三つの親子関係からの推測

徳見，道夫
九州大学大学院言語文化研究院言語環境学部門・言語情報学講座

<https://doi.org/10.15017/7148432>

出版情報：言語科学. 46, pp.47-59, 2011-03-17. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：



『エドワード三世』の作者について

—歴史劇における三つの親子関係からの推測—

九州大学言語文化研究院教授 徳見道夫

I

シェイクスピアの歴史劇には、様々な親子関係が存在する。『ヘンリー四世』の王と息子ハリー(フォルスタッフはハルと呼んでいるが、ヘンリー四世はハリーと呼んでいるので、本論文でもハリーと呼ぶことにする)、ノーサンバランド伯とホットスパー、『ヘンリー六世第1部』のトールボット親子、ヘンリー六世と王子、『エドワード三世』のエドワード三世と王子黒太子などである。⁽¹⁾ 本論文では、トールボット親子、ヘンリー四世とハリー、エドワード三世とその息子黒太子という、三つの異なる親子関係の描写研究を通して、『エドワード三世』がシェイクスピアの作品であることが証明できるかどうかを論じたい。⁽²⁾

歴史劇以外のジャンルの作品では、親子関係の描写は舞台上で詳細に描写されることはない。例えば、悲劇に分類される『ハムレット』では、先王である父親は亡霊として登場し、ハムレットの行為に関与するのは、彼が母親ガートルードを苦しめている時だけである(三幕四場)。ロマンス劇の『シンベリン』では、シンベリンの息子たちであるグイディリアスとアーヴィラガスは、幼い時に誘拐されウェールズで育てられる。彼らの親の役割は、他の登場人物(ベラーリアス、変名してモーガンと名乗る)が果たすことになる。同じくロマンス劇の『テンペスト』では、親と娘は魔法使いと清純な娘で、その間に教えや伝統の授受は見受けられない。むしろ父親であるプロスペローは、娘ミランダが幼いころは、彼女(と本人)の出生を隠している。またナポリ王のアロンゾーとその息子ファードィナンドの親子関係も、それほど濃密に描かれていない。歴史劇の親子関係だけは、他のジャンルの劇より、舞台上で詳しく描かれている。それは家系の継続(王であれば王権の継承)が、特に重要だからである。

『ヘンリー六世第1部』に登場するトールボット親子は、フランスの戦場で二人とも死ぬことになるが、お互いに相手が生き延びることを願う。戦況が厳しい状況で、父親は息子に「この戦場を逃れて、私が戦死したら復讐をしてほしい」(四幕五場)と諭すが、息子のジョンは武人としての名誉を重んじて、戦場から逃亡しようとせず、むしろ将官として高名な父親を生かそうとする。お互いを思う気持ちは純粋なもので、おそらくこの劇を見たエリザベス朝時代の多くの観客の涙を誘ったことであろう。トールボット親子の場合は、息子が先に死んで、親がその後を追うのであるが、武人としてのトールボット親子にとって、「如何に死ぬか」が重要な問題となってくる。卑怯な死に方さえしなければ、死は

甘受される。この親子は、死についての感想はほとんど述べないが、トールボットは息子ジョンの死体を抱いて、次のような感動的な台詞を語る。

(原文)

Thou antic death, which laugh'st us here to scorn,
Anon from thy insulting tyranny,
Coupled in bonds of perpetuity,
Two Talbots, winged, through the lither sky
In thy despite shall scape mortality. (IV.vii.18-22) ⁽³⁾

(拙訳)

道化師⁽⁴⁾の死に神め、我々を軽蔑して笑っているな。
すぐにお前の無礼な暴虐から逃れて
永遠の絆に結ばれて、トールボット親子は、
羽根を得て、従順な天空を通り
お前をものともせず、不死の世界に行くであろう。

この台詞には、武人らしく、死についての臆想はなく、死に対する挑戦のみがある。死そのものについての思いは、トールボットらしくないと判断して、シェイクスピアは表現しなかったであろう。「潔さ」という価値判断だけが、トールボット親子には重要であった。ヘンリー四世の親子関係に存在するような政治的駆け引き、あるいはエドワード三世の息子黒太子に対する厳しい試練などには、まったく言及されていない描き方が、トールボット親子の描写では特徴的なことである。トールボットの息子ジョンの死骸を見て、バーガンディの語る台詞「間違いなく立派な武将になったであろう」(Doubtless he would have made a noble knight.—IV.vii.44) は、オルレアンの子生児(デュノワ伯爵ジャン)とは違うバーガンディの品性と共に、ジョンの騎士としての価値をも語っている。

II

『ヘンリー四世』に登場するヘンリー四世と王子ハリーの親子関係は、イングランド王とその後継者であるので、より複雑な感情が混ざり合っている。第I節で論じたように、トールボット親子は武人であるから、政治的な配慮をすることはないが、ヘンリー四世親子には、王権という重圧があるため、その関係はどことなくぎこちなく、心から打ち解けることはあまりない。⁽⁵⁾ 劇冒頭で、ヘンリー四世はホットスパーのような息子がほしいと願い、ホットスパーの父親であるノーサンバランド伯をうらやましいと思っている。何故なら、武人の鏡として世間で評判のホットスパーのほうが、放蕩息子のハリーよりも王位に

相応しいと、彼は思っているからである。

(原文)

Yea, there thou mak'st me sad, and mak'st me sin
In envy that my Lord Northumberland
Should be the father to so blest a son—
A son who is the theme of honour's tongue,
Amongst a grove the very straightest plant,
Who is sweet Fortune's minion and her pride,
Whilst I, by looking on the praise of him,
See riot and dishonour stain the brow
Of my young Harry. (I.i.78-86)

(拙訳)

実に、そこで私は憂鬱になり、嫉妬の罪を犯す、
ノーサバランド伯がホットスパーという
恵まれた息子の父親であることに。
名誉ある人々の口の端にのぼり、
さながら、木立の中で、まっすぐに伸びた木、
芳しい運命の寵児であり誇りの息子。
それにひきかえ、彼の称賛を見ながら、
放埒と不名誉が、わが息子ハリーの
額を汚しているのを、私は見ている。

これはヘンリー四世が持っている王子ハリーに対する評価であるが、王子の片面しか見ていないことがすぐ明らかになる。観客は激しやすく女性蔑視でもあるホットスパーを、王位後継者として相応しくないことを見抜いている。『ヘンリー四世第1部』一幕三場でホットスパーは、王の言葉に激昂して、父ノーサンバランドや伯父ウスターが宥めても、容易にその怒りを収めることができない。また、彼の妻であるパーシー夫人に対する態度は、男尊女卑をそのまま絵に書いたようなものである(二幕三場)。さらに、あまりにも名誉ばかり追求するので、フォルスタッフから「名誉とは何だ、言葉だ」(What is honour? A word. —V.i.132)と間接的に非難される。フォルスタッフのこの台詞は、名誉ばかりを重視するホットスパーに向けられた嘲りとも考えられる。彼が王位に就くには、もっと柔軟で用意周到な思考が必要であろう。

一方、ハリーは王位に相応しい人物として、シェイクスピアは描いている。劇が始まると早々に、シェイクスピアは伏線を敷いて、ハリーに自分の将来像を次のように観客に語らせる。

(原文)

So when this loose behavior I throw off
And pay the debt I never promised,
By how much better than my word I am,
By so much shall I falsify men's hopes,
And like bright metal on a sullen ground,
My reformation, glitt'ring o'er my fault,
Shall show more goodly and attract more eyes
Than that which hath no foil to set it off.
I'll so offend, to make offence a skill,
Redeeming time when men think least I will. (I.ii.208-217)

(拙訳)

だから、この放埒な行いをやめ、
返すと全く約束していない借金を払えば、
私はどれほど言葉以上の好漢となり、
どれほど人々の期待を良い意味で裏切るであろう。
暗い地の上にある輝く王冠のように、
罪の上に輝く私の改心は、
より立派に、より多くの人々の目を引くであろう、
引き立たせる「引き立て役」がないよりは。
戦略として、罪を犯していこう。
まったく期待されないときに名誉を挽回しよう。

王子ハリーは、イングランドの国民がもっとも期待しないときに、放蕩息子の衣を脱ぎ捨てると宣言する。王子は仲間意識を政治的な目的に利用しているとRichard Helgersonも認めて、次のように論じている。

Shakespeare's Prince Hal also claps hands and at least pretends to be friends with Falstaff and his thieving crew, but for Hal, unlike his counterpart in *The Famous Victories*, this is always a pretence. He uses the appearance of good fellowship for his own politic ends. ⁽⁶⁾

リチャード二世を廃位して(1399 年)、王位についたヘンリー四世は、王権の維持や息子ハリーのために、苦勞するように運命づけられているのかもしれない。リチャード二世は、ポンティフラクト城に送られ、原因不明の死を遂げているが、ヘンリー四世の示唆による

ものであることは想像に難くないであろう。

ヘンリー四世の親子関係は、『ヘンリー四世第2部』で、王が死ぬときにもっとも濃厚に描写される。ハリーはヘンリー四世が死んだと思って王冠を手にするが、そのような軽率な行為をする王子に向かって、ヘンリー四世は、父親として、また王として、最期の説教をする。それは国内の政治的安定のために、外征を実施することをハリーに勧めた内容である。

(原文)

... So thou the garland wear'st successively.
Yet though thou stand'st more sure than I could do,
Thou art not firm enough, since griefs are green,
And all [my] friends, which thou must make thy friends,
Have but their stings and teeth newly ta'en out;
By whose fell working I was first advanc'd,
And by whose power I well might lodge a fear
To be again displaced; which to avoid,
I cut them off, and had a purpose now
To lead out many to the Holy Land,
Lest rest and lying still might make them look
Too near unto my state. Therefore, my Harry,
Be it thy course to busy giddy minds
With foreign quarrels, that action, hence borne out,
May waste the memory of the former days. (IV.ii.201-215)

(拙訳)

だからお前は正統な王として王冠をかぶる。
しかし、私より強固な基盤に立つことになるが、
十分ではない、悲しみがまだ癒えていないからだ。
お前も味方につける必要がある私のすべての味方は、
毒牙や歯は抜かれたばかりだ。
彼らの獐猛な働きで、私ははじめ王位を得た、
そして、同じ力で、もう一度廃位されるという
怖れを抱いたのだ。それを避けるために、
臣下の首をはね、時には聖地へ多くの臣下を
引き連れていこうという計画を練った、
安息と静かにすることが、彼らに
私の地位をおびやかすことがないように。ハリーよ、

落ち着きのない心を外征でいっぱいにするのを
これからの方針とするがよい。その行為は、異国でされるので、
昔の記憶は消滅するかもしれない。

イングランド国内で、不平不満を抱いている貴族・豪族の目を内政から逸らすには、外征が一番よいと、死んでいく父親ヘンリー四世は、息子のハリーに忠告する。第 III 節で論じるエドワード三世が始めた 100 年戦争(1337 年～1453 年)を、もう一度蒸し返すことを勧めているのである。ヘンリー五世となったハリー王子は、父親の勧めを忠実に実行して、フランスの王位継承権を要求する。その経緯は、シェイクスピアの作品『ヘンリー五世』の中に詳しく描かれている。

ヘンリー四世の親子関係には、第 I 節で論じたトールボット親子にはない政治的駆け引きの視点が導入されている。また息子ハリーの王としての資質を獲得する過程が描写されており(『エドワード三世』も王エドワードが真の王としての資質を獲得する物語と解釈することができる)、ヘンリー四世の世界を様々な角度から描くことに成功している。老練な作家としてのシェイクスピアの視点が、『ヘンリー四世』の背後には存在する。因みに、『ヘンリー四世』は第 2 四部作、『ヘンリー六世』は第 1 四部作に属しているので、それぞれ別の時期に創作されたものである。テーマの統一性、語句の選択の適切性、人物描写の描き方等に、大きな差があることは否めない。

III

『エドワード三世』で描かれる親子関係は、第 I 節と第 II 節で論じた二組の親子とは趣を異にする。エドワード三世は、フランスとの戦いの中で、王子の技量を試すような行動をとる。ライオンが千尋の谷に子供を落として、その度量を試しているかのようである。三幕五場で王子が敵に取り囲まれ窮地に立たされたとき、オードリーが助けに行こうとすると、エドワード三世は「オードリー、落ち着け。一兵たりとも、王子を助けに行ってはならぬ、行けば死刑だ」(Audley, content. I will not have a man, / On pain of death, sent forth to succor him.—III.iv.45-46)と命令し、王子を救出に行こうとしない。黒太子を助けに行かない理由を、エドワード三世は次のように説明する。

(原文)

Let Edward be deliver'd by our hands,
And still in danger he'll expect the like;
But if himself, himself redeem from thence,
He will have vanquish'd, cheerful, death and fear,

And ever after dread their force no more
Than if they were but babes or captive slaves. (III.v.48-53)

(拙訳)

息子エドワードを我々の手で救えば、
これからも危険に陥ると、同じことを期待するだろう。
だが、もし自分で自分を窮地から救えば、
気持ちよく、死と恐怖を克服するであろう。
そして、この後、敵を赤ん坊か奴隷のように思い、
恐れることはないであろう。

エドワード三世の王としての立場は、黒太子が将来のイングランド王として相応しいかどうか、また現在の状況がどのように息子の将来に影響を与えるか、を冷静に判断しようとしている。決して、自己の感情に溺れることはない。

第I節で論じたトールボット親子の場合、二人とも死んでいく武人であるから、将来のことをあまり考えないし、また考える余裕もない。ただお互いの身を心配しあい、死への瞑想・思いも吐露することはなかった。第II節で論じた『ヘンリー四世』2部作では、リチャード二世殺害のために、イングランド国内の政治が不安定になった経験から、父親であるヘンリー四世は、貴族たちの不満を逸らすために、ハリーにフランスへの遠征を勧める。ヘンリー四世は、王子が将来不安なく政治を行うための技術を伝授していると言える。彼自身は、聖地への憧れが強く(これは半ば本気、半ば政治的な配慮であろう)、死への不安が常に付きまとっていた。「だが、その部屋に運んでくれ、私はそこで死のう。そのエルサレムという部屋で、ハリーは死ぬのだ。」(But bear me to that chamber, there I'll die:/ In that Jerusalem shall Harry die.—IV.ii.366-367)と語り、彼は聖地ではなく、エルサレムと名付けられた部屋で死んでいく。数々の内紛のために、希望する十字軍による聖地遠征ができず、エルサレムと名付けられた部屋で最後を迎えるヘンリー四世に、観客は大きな同情を抱いたことであろう。上記のヘンリー四世やトールボットとは異なって、エドワード三世は、王として冷静に、何の感情も交えずに(もちろん親としての愛情は持っていることは当然であるが)、王子を観察している点で、王位に就いている人物として相応しいと言える。三つの親子関係はすべて環境や政治的背景が違っているので、一概に言えないが、エドワード三世の親子が、もっとも王家(あるいは身分の高い家系)に相応しい印象を観客に与える。

さらに王子である黒太子は、死への決意と思いを披歴する。『ハムレット』の主人公は作品中で死の瞑想をしているが、^⑦ 歴史劇である『エドワード三世』の中にも、死の瞑想が描かれている。『ヘンリー五世』の中で、ハリー(この時はヘンリー五世)は、アジンコートの戦いの前に、死を強く意識して父親の罪(正統な王であるリチャード二世廃位)を赦すように神に祈るが、^⑧ 黒太子ほど死への覚悟を語ることはない。黒太子は死への思いを、次のように語る。

(原文)

I will not give a penny for a life,
Nor half a halfpenny to shun grim death,
Since for to live is but to seek to die,
And dying but beginning of new life.
Let come the hour when He that rules it will,
To live or die I hold indifferent. (IV.iv.157-162)

(拙訳)

生命に 1 ペニーも払うことはしないし、
おぞましい死を避けるためにさらに何もしない、
何故なら、生きることは死を求めることで、
死とは新しい生命の始まりだからだ。
時を統べる神が望むその時間が来ればよい、
生きようが死のうが、構わない。

ハムレットの死への覚悟を示すような台詞を黒太子は語るが、この場面はシェイクスピアの筆致を彷彿させるものがある。エドワード三世と黒太子との間に存在する緊張関係を、これほど明確に描写する技能は、作家としての能力を十分に表現していると評価することができる。このことからすぐに、シェイクスピアが『エドワード三世』の作者とは断定できないが、その可能性はかなり高いと断じざるを得ない。

IV

当然、劇中の親子関係は、日常生活の親子関係とは異なっている。前者の親子関係がはるかに緊張を伴っていることは当然である。トールボット親子は、緊張が極度に高まった戦場で、お互いの気持ちをさらけ出す。ヘンリー四世とハリーは、王権をめぐる内面的な争いを繰り広げる。王が死ぬ前に王冠を奪うハリーの行動は、王権の危険性・危うさを表現している。エドワード三世も息子の勇気を戦場で試している。このような親子関係は、日常生活では見られるものではない。緊張する状況で展開される親子関係は、正直な気持ちを表現することが多いことは、人間の日常的経験として納得できる。その緊張関係という点では、エドワード三世親子のそれがもっとも強く直線的であると思われる。

第 III 節で論じたように、上記三つの親子関係のうち、エドワード三世の親子関係こそ、王としての親の態度に相応しい。王子は将来王位を継ぐ人間であるから、普通の資質を持った人物では王権執行が円滑にできないので、厳しい政治状況の中でも、落ち着いた行動

が取れる人物こそ、王位継承者には適任である。黒太子はエドワード三世の課した試験・試練を、見事通過したことになる。その親子の緊張関係は、ヘンリー四世と息子ハリーの親子関係よりも強烈であり、しかもトールボット親子のように、戦場における厳しさも表現されている。エドワード三世親子の描写は、『ヘンリー四世』や『ヘンリー六世』で描かれる世界と勝るとも劣らない。

最近では、『エドワード三世』は、ほとんどシェイクスピアの作品であると考えられている。その事情を反映して、『エドワード三世』は、1997年出版の『リバーサイド・シェイクスピア全集第二版』(Houghton Mifflin 出版)の中に所収されているし、1998年にはケンブリッジ・シェイクスピアの一冊として、『エドワード三世』が出版されている(注は Giorgio Melchiori)。これら二つの出版物から、すぐにこの作品をシェイクスピアの作品と考えるのは、早計かもしれないが、上記三つの親子関係の描写を並べて考えてみると、『エドワード三世』の親子関係が、親子の心理的争い、王子への試験、死への瞑想などを含んでおり、より重層的な構造となっているので、シェイクスピアの作品と認めることは、かなり可能性があると思われる。⁽⁹⁾

ただ一つ、シェイクスピアが『エドワード三世』の作者ではない理由として挙げられる理由は、この作品に存在する「明快さ」である。『ヘンリー六世』3部作には、入り組んだあらずじと荒削りな人物描写がある。この作品には、シェイクスピア単独説ではなく、合作説が常に付きまとっているが、百年戦争の複雑な経緯を上手く表現する技量は、シェイクスピアの筆力を明らかに感じさせる。『ヘンリー四世』2部作では、フォルスタッフという怪人を登場させ、作品のテーマに複雑さを与えている。『ヘンリー五世』では、アジンコートの戦いの前に、ヘンリー五世(前のハリー王子)が王権についての複雑な思いを語り、明快な答えを出していない。読者や観客は、理解しがたい混乱する世界に放り込まれ、その解決は観客・読者に任される。『エドワード三世』には、そのような晦渋性がないという事実が、他の三作と決定的に違うところである。本論文では、三つの親子関係を通して、『エドワード三世』の作品の質を考え、この作品がシェイクスピアによって書かれた可能性が高いことを証明してきた。最後に「明快さ」の存在が問題として残るが、これは河合祥一郎氏の「印象批評によって反論しているにすぎないからだ」という非難に当てはまるであろう。⁽¹⁰⁾ シェイクスピア批評の歴史では、「印象批評ほど、当てにならないものはない」ということが定説になっているからである。しかしながら、本論文では歴史劇における三つの親子の描写を通して、『エドワード三世』がシェイクスピアの作品に近いという結論を導いたが、さらなる研究が必要であることを表明して、この論文を終わることにしたい。

(注)

1. 河合祥一郎氏によれば、『エドワード三世』はシェイクスピアの作品であると、ほとんど認められているようである。河合祥一郎訳『エドワード三世』(白水社、2004 年)、169 頁以降を参照のこと。

本論文では、歴史劇に描かれる三つの親子関係に焦点を当てて、この作品がシェイクスピアの作品かどうかを、検証することが目的である。しかしながら、外的証拠ではなく、内的証拠で、ある作品をある作家のものであると証明することはかなり難しい。本論文でも 100 パーセントの可能性を提示することは困難で、若干の可能性を提示することができるだけである。

2. 父と子の関係は文化的構築物であると、すでに L. A. Montrose が指摘している。

Although biological maternity was readily apparent, biological paternity was a cultural construct for which ocular proof was unattainable. More specifically, the evidence for *unique* biological paternity, for the physical link between a patriarchal man and child, has always been exiguous.

「生物学的な母親性はすぐに明らかであるが、生物学的な父親性は文化的構築物であり、その視覚上の証拠は得られなかった。もっと具体的に言えば、家父長制の父と子の肉体的繋がりにとって、独自の生物学的父親性の証拠はいつも乏しかった。」

Louis Adrian Montrose, “Shaping Fantasies: Figurations of Gender and Power in Elizabethan Culture”, in Stephen Greenblatt (ed.), *Representing the English Renaissance* (California U.P., 1988), pp. 42-43.

3. シェイクスピアからの引用はすべて、G. Blakemore and J. J. M. Tobin (eds.), *The Riverside Shakespeare, 2nd Edition* (Houghton Mifflin, 1997) からのものである。
4. antic を「道化師」と訳したのは、Edward Burns (ed.), *King Henry VI, Part 1* (The Arden Shakespeare, 2000) の注を参考にしたからである。因みに、松岡和子氏は、この部分を「無様な死に神め」と訳している。松岡和子訳『ヘンリー六世—全三部』(筑摩書房、2009 年)を参照のこと。
5. 王子は王権を奪う存在であることは David M. Bergeron も認めている。

Presumably James understood the paradox of this royal child whose ultimate function was to replace his;

「多分、ジェイムズは、この王子のパラドックス(王子の究極的な機能は自分の王位を奪うこと)を理解していた。」

David M. Bergeron, *Royal Family, Royal Lovers—King James of England and Scotland* (Missouri U. P., 1991), p. 93.

6. Richard Helgerson, “Shakespeare and Contemporary Dramatists,” in Richard Dutton and Jean E. Howard (eds.), *A Companion to Shakespeare’s Works: The*

Histories (Blackwell Publishing Ltd., 2003), p. 33. 「シェイクスピアのハル王子も拍手をして、少なくともフォルスタッフや彼の泥棒仲間と友達のふりをする。しかし、『著名な勝利』に登場するヘンリー王子とは違って、ハルにとってこれはいつも見せ掛けである。ハルは己の政治目的のために良き仲間というふりを利用する。」

7. ハムレットは次のような死の瞑想を行っている。

(原文)

To die, to sleep—

To sleep, perchance to dream—ay, there's the rub,
For in that sleep of death what dreams may come,
When we have shuffled off this mortal coil,
Must give us pause; there's the respect
That make calamity of so long life: (*Hamlet*, III.i.63-68)

(拙訳)

死ぬことは眠ることだ、
眠れば、たぶん夢を見る、そこが問題だ、
この世を脱ぎ捨てたとき、
死の眠りで、どのような夢を見るか、
それが死への希求に水をさす、人に長い人生の
苦痛を耐えさせるのは、その点だ。

8. ヘンリー五世は、アジンコートの戦い前夜に、父の犯した罪(リチャード二世を廃位して王位に就いたこと)を忘れてくれるように、神に祈る。

(原文)

Not to-day, O Lord,

O, not to-day, think not upon the fault
My father made in compassing the crown!
I Richard II's body have interred new,
And on it have bestowed more contrite tears,
Than from it issued forced drops of blood. (*Henry V*, IV.i.292-297)

(拙訳)

神よ、今日だけは
父が王冠を得る際に犯した罪を、
今日だけは考えないで下さい。
私は、リチャード二世の遺骸を埋葬し直し
その上に、身体から無理やり流した血以上に
後悔の涙を注ぎました。

9. 『エドワード三世』が恋の物語と戦争の話に分割されるので、一人の作家の手になる

ものではないと結論づけられているが、王エドワードが、
(原文)

Our God be praised! — Now, John of France, I hope
Thou knowest King Edward for no wantonness,
No love-sick cockney, nor his soldiers jades, —
But which way is the fearful king escap'd? (III.iv.112-125)

(拙訳)

神は讃えるべきかな。さて、フランス王ジョンよ、私は願う、
お前が、エドワード王が気まぐれでもなく、恋わずらいの
軟弱男でもなく、彼の兵士がやせ馬でもない知っている、と。
しかし、臆病な王は、どちらに逃げたのだ。

と語る部分は、前半の恋と後半の戦争の話を結びつけているとも考えられる。何故なら、“love-sick cockney”という表現は、前半のエドワード王がソールズベリー伯爵夫人に恋をしている状況に言及している可能性があるからである。もしこの表現は一般的なエドワードを表現していると考えれば、前半と後半とを結びつけるキー・ワードにはなり得ないことは明らかである。残念なことに、筆者はどちらとも決することはできないと考えているが、『エドワード三世』の注釈者である Giorgio Melchiori は、“with a further allusion to the Countess of Salisbury episode”(p.133)と注をして、前半のエドワード三世のことを示唆していると指摘している。Giorgio Melchiori (ed.), *King Edward III* (Cambridge U. P., 1998).

なお、『エドワード三世』と『ヘンリー五世』との類似点が多い。両作品の類似点と相違点を点検して、さらに深く『エドワード三世』の作品の質を探り、この作品がシェイクスピアのものかどうか判断することは興味深いテーマである。

10. 河合祥一郎訳『エドワード三世』179頁を参照のこと。

Jonathan Hope は、助動詞 do や関係代名詞を分析して、『エドワード三世』がシェイクスピアの作品であることを証明しようとしているが、面白い試みであると思う。特に面白い点は、「助動詞 do をシェイクスピアよりフレッチャーのほうが規則的に使用している。それはフレッチャーがシェイクスピアより若くて、階級的にも上位であるし、教育も高いし、シェイクスピアよりも都会に住んでいたからである」と結論づけている個所である。さらに詳しく知りたい方は、Jonathan Hope, *The Authorship of Shakespeare's Plays: A Socio-linguistic Study* (Cambridge, U. P., 1994), pp. 11-12 を参照のこと。

またコンピュータと統計の技法を駆使して、作品の作者を割り出す手法を用いている M. W. A. Smith は、『エドワード三世』について、次のような結論を導き出している。

From the results obtained in this paper, stylometric evidence that *Edward III* is Shakespearian in its entirety is undoubtedly stronger than the equivalent

evidence for the authentic *Richard II*. Thus, if *Edward III* is accepted as Shakespearian, a further inference is that all of the play dates from about the time of *2 Henry VI* and *Richard III*, that is, around 1590, rather than closer to the year of its first printing.

「この論文で得た結論から、『エドワード三世』はすべてシェイクスピアの作品であるという統計的文体分析の証拠は、シェイクスピアの作品と認められている『リチャード二世』の同じような証拠より、疑いもなく強い。かくして、『エドワード三世』がシェイクスピアの作品と受け入れられれば、その劇の成立年は、最初の出版の時期(1594 年)に近いと言うよりは、むしろ『ヘンリー六世第二部』と『リチャード三世』が書かれた頃、すなわち、1590 年ころの作品であると、さらに推察される。」

M. W. A. Smith, "The Authorship of *The Raigne of King Edward the Third*," in *Literary and Linguistic Computing*, Vol. 6, No. 3 (Oxford University Press, 1991), p. 171.

On the Authorship of *King Edward III*

While many critics accept that Shakespeare at least contributed to the writing of *King Edward III*, Richard Proudfoot in 1985 published a paper claiming that Shakespeare created the play alone. After that, the play was included in *The Riverside Shakespeare, 2nd Edition*, published in 1997, and Giorgio Melchiori edited the play as a volume of *The New Cambridge Shakespeare* in 1998.

This paper compares three types of relationship between fathers and sons in Shakespeare's Histories and *King Edward III* and tries to show that Shakespeare might indeed have written the play by himself.

In the first part of *Henry VI*, Talbot and his son, John, are described in detail as a warrior family. They do not have the political consciousness of Henry IV and his son (Harry, later Henry V), who, due to their present and future responsibilities as holders of regal power in the kingdom, are necessarily acutely aware of political conditions.

Edward III has his son the Black Prince undergo a trial and tests his ability to function in an adverse situation. Edward III seems to be a more suitable king than Henry IV. Moreover, while Harry does not contemplate on death, the Black Prince is forced to do so before a battle, much as Hamlet is before his fencing match with Laertes. These points provide inferential support for the contention that Shakespeare wrote *King Edward III* by himself.